

研修会報告

平成 29 年 5 月 15 日

研修会テーマ 平成28年度病理組織検査精度管理フォローアップ研修会

開催日時 平成 29 年 5 月 13 日 (土) 14:00~17:10

会場 東北大学病院 臨床小講堂

司会: 東北医科薬科大学病院 佐藤 正樹

講演 1 平成 28 年度病理組織検査精度管理調査

報告・検討・サイトケラチンについて解説

座長: 東北医科薬科大学病院 佐藤 正樹

講師: 宮城県対がん協会がん検診センター 検査課 佐藤 しげみ 技師

仙台厚生病院 臨床検査センター 病理診断科 諸橋 彰 技師

公立刈田総合病院 病理科 村山 晴喜 技師

講演 2 自動免疫染色装置各メーカー担当者からの解説

座長: 宮城県対がん協会がん検診センター 検査課 佐藤 しげみ

講師: アジレント・テクノロジー株式会社 松本 靖広

株式会社ニチレイバイオサイエンス 谷村 純一

ライカマイクロシステムズ株式会社 小沢 広樹

ロシュ・ダイアグノスティック株式会社 筒井 康博

講演 3 癌転移の病理学的メカニズムと解析 ~平成28年度精度管理調査 総評を含めて~

座長: 東北医科薬科大学病院 佐藤 正樹

講師: 東北医科薬科大学医学部 病理学教室 教授 中村 保宏 先生

生涯教育点数 専門 20 点

参加者 会員参加者 21 名 非会員参加者 1 名 実務委員 (講師含む) 7 名 計 29 名

内容

【講演 1】

「平成 28 年度病理組織検査精度管理調査」の報告を佐藤 技師が行った。

評価時問題となった「リンパ節陰性の非特異反応」を Roche の協力により検討したのち、該当施設に再染色を依頼した。その検討結果及び再染色結果を報告。

また、5 年前に行った「サイトケラチン免疫染色」との比較検討を行い報告。

引き続き、熱による賦活化を行った際に染色されてくる「樹状細胞」について、文献を基に佐藤技師が報告。

- 1、樹状細胞は CAM5.2 (CK8) で染色されてくる。汎サイトケラチン中に CK8 は含まれており、熱による賦活化時は注意が必要である。
- 2、がん転移を認めたリンパ節に樹状細胞を認めないのは、がん免疫逃避機構の働きにより、リンパ節の免疫産生が抑制されることが一因と考えられる。

「サイトケラチン染色の検討」として諸橋技師より報告。

抗サイトケラチン抗体が診断に役立った症例を報告。

「迅速免疫装置 R-IHC を用いたサイトケラチン染色と伸展板法の比較」を検討し報告。

迅速時にリンパ節の転移の有無を診断するのに R-IHC は非常に役に立つ。しかし、装置を設置しているのは、ごく一部であり、簡便な迅速免疫染色として「伸展板法」を紹介した。これは、37℃の伸展板上で抗原抗体反応を行うものであり、どの施設でも容易に行える。しかし、診断に支障はないものの R-IHC と比較すると染色性に差を認めた。R-IHC も簡便な手法ではあるが、免疫染色機と比較すると染色性に差を認め、あくまで R-IHC や伸展板法は HE 染色の診断補助であるということを再認識させられた。

「抗サイトケラチン抗体について」村山技師より報告。

サイトケラチンは細胞骨格を成す中間系フィラメントであり、ミカヅキモの細胞骨格を示した動画等を用いて、抗サイトケラチン抗体について詳細に解説。

また、原発不明癌には、CK7 と CK20 のサブタイプを染色し診断の補助としている。その染色組み合わせによる原発癌の推測を再確認した。

【講演 2】

「自動免疫染色装置各メーカー担当者からの解説」

(質問事項)

- 1、貴社の「抗サイトケラチン抗体（汎サイトケラチン抗体）免疫組織化学染色」の推奨プロトコルを教えてください。また、染色する上で注意点があれば教えてください。
- 2、貴社の「抗サイトケラチン抗体（汎サイトケラチン抗体）」で他社と異なる特徴がありましたら教えてください。
- 3、宮城県では、推奨プロトコルを用いてない施設が多いのが現状です。
推奨法の位置付けをどのようにお考えですか？
- 4、自動免疫染色装置で今までに認められたトラブル（故障）があれば教えてください。
また、トラブルを事前に防ぐために日常注意して欲しいことがありましたら教えてください。

自動免疫染色装置メーカー 4 社に事前に上記の質問事項を配布し、その回答と質疑応答を行った。メーカー 4 社が一度に揃って討論を行うことは大変貴重なことであり、参加者からも活発な意見が出された。

【講演 3】

「癌転移の病理学的メカニズムと解析 ～平成 28 年度精度管理調査 総評を含めて～」

中村 保宏先生より平成 28 年度精度管理調査の総評を頂いた。

技師とは異なる、病理医の立場から標本評価の観点を伺った。

引き続き、1、癌転移の基礎知識 2、癌転移と分子病理学的メカニズム 3、センチネルリンパ節の病理学的意義と臨床応用についてご講義頂いた。

癌転移の基礎から、最近話題の EMT (Epithelial Mesenchymal Transition) や癌浸潤と転移に関与する因子及び関連遺伝子についても詳細に解説して頂いた。

癌転移のメカニズムで「転移予定臓器が転移前から準備を始めている」との話は、癌細胞の複雑なメカニズムを知ることが出来、癌治療の難しさを感じた。

また、センチネルリンパ節診断システム OSNA 法について解説して頂いた。OSNA 法は、摘出したリンパ節を可溶化し標的遺伝子を増幅検出する方法で、リンパ節全体を短時間で検索出来、術中リンパ節転移の診断に非常に有用である。OSNA 法の意義と今後の課題について詳細に解説して頂いた。

癌転移に関する基礎知識と最新の情報に触れることが出来、非常に有意義であった。

文責： 宮城県対がん協会がん検診センター 検査課 佐藤 しげみ